

たましまの未来に渡り鳥の集う干潟を残したい！！

たましま 干潟と鳥の会

岡山県

1. はじめに

岡山県は瀬戸内海の環境保全に向けた計画「瀬戸内海の環境の保全に関する岡山県計画」を策定している。この計画では、干潟が文化的な側面や生物多様性・生物生産性などから重要であり、保全と再生に取り組むことなどが記載され、干潟の面積も保全の指標として扱われている。

変更前の計画では、干潟の減少は大規模干拓や沿岸開発によるものであり、干潟の一部では礫化や有機物の堆積による環境悪化も見られ、適切な維持管理と積極的な保全が求められると書かれている。

にもかかわらず、昭和20年頃には岡山県内に約4,000haの干潟が存在していたものの、大規模干拓や沿岸開発の結果、平成18年の調査では527haまで減少し、更に平成27年の調査では385haにまで減少しているとも記載されており、干潟環境の減少には歯止めがかけられない状況が続いている。

当会では、岡山県内沿岸部、河口部の干潟を利用する渡り鳥（シギ・チドリ類）の調査を実施しており、その結果、渡り期と越冬期の両方で、人工島、玉島ハーバーアイランドの最南端にある浚渫土処分場が最も多くのシギ・チドリ類が観察される場所である、ということが判明した。干潟生態系の頂点ともいえる鳥類の確認数が浚渫土処分場となるというのは県内の干潟が危機的な状況にあり、生物の生息環境が制限されている現状を考えると、うなずける話でもある。

この浚渫土処分場の埋め立て時の環境影響評価書には、西側沖に環境回復事業として10haの人工干潟を造成する、という計画が記載されている。平成20年3月25日付で環境大臣からも干潟造成について意見が出されており、計画から施工後の事後調査について、必要な機能が維持されるための適切な管理体制を構築すること、などとされている。

干潟の環境改善は多くの生物や海洋環境にとっても良い影響をもたらすということが岡山県の計画の中でも語られており、新たな人工干潟が創られることについても期待は大きい。しかしながら、地元、玉島地域の住民でも人工干潟造成の計画を知る人は少なく、地域の方々に干潟の重要性を改めて啓発し、干潟の魅力を伝えながら、地域住民と一緒に干潟を守り育て、次世代に引き継ぎたい、という思いから、「たましまの未来に渡り鳥の集う干潟を残したい！！」というタイトルで本助成に応募した。

活動は、以下の A～E、5つの項目で順番に実施した。

活動の詳細は以降の各項目のページにわけて記載する。

- A) たましまの干潟を利用する渡り鳥の観察会
- B) 教えて！昔のたましまの干潟～昭和のたましまの干潟を知る世代へのインタビュー及び動画作り
- C) たましまの干潟に生息するいきもの観察会
- D) たましま 干潟マップづくりワークショップ
- E) たましまの未来に渡り鳥の集う干潟を残したい！！シンポジウム開催

A) たましまの干潟を利用する渡り鳥の観察会

イベント名：守屋さんに聞いてみよう！高梁川河口干潟 秋の渡り鳥観察会

実施予定日：2022年9月18日（土） 9：30～10：30

実施場所：高梁川河口干潟（左岸）

講師：NPO 法人 バードリサーチ シギ・チドリ類調査事務局 守屋 年史氏

参加希望者：14名

冒頭に記載した通り、当会の調査では、岡山県内で、渡り性水鳥シギ・チドリ類の種類、数ともに多く見られる場所が、人工島・玉島ハーバーアイランド沖の浚渫土を入れて埋め立て地となった。

付近の自然環境は、県内最大と言われている高梁川河口干潟があり、その底質は泥の流出により硬い砂質の場所も多くなりつつあり、カニなどを好んで食べるチュウシャクシギなどが春に多く見られるものの、秋の渡り期のシギ・チドリ類はあまり多くない。そのため、人工島・玉島ハーバーアイランドで観察会が実施できればよかったが、工事現場ということもあり、立ち入り可能でシギ・チドリ類がよく見える場所が少なかったため、高梁川河口干潟での観察会を計画した。

講師にはNPO 法人 バードリサーチ、シギ・チドリ類調査事務局の守屋年史氏を招き、当日フィールドでの解説などを行ってもらう計画だった。

尚、本計画は、実施当日に猛烈な勢力で列島縦断か？と言われた台風14号の発生により中止。直前まで開催を希望されるお声もいただいたため、屋内で何かできないか検討したが、参加の道中に危険があってはならないということで全面的に中止となった。

当会では初めての観察会となった。広報をどのように進めていくかが一番苦労した。チラシをたくさん作成して配ったが、倉敷市内の施設の多くは倉敷市の共催がないとチラシを置いてもらえず、チラシを置いてもらう先を探すのが大変だった。

実施の目標を以下のように設定した。

- 1) 人工島・玉島ハーバーアイランドに多くの渡り鳥が飛来していることについて解説。
- 2) 参加者の多くがシギ・チドリ類やその他の野鳥を見つけることができ、観察し、その魅力に触れること。
- 3) 渡り鳥の飛来する干潟の豊かさについて知ってもらう
- 4) 1) で解説した内容と本観察会で見られた渡り鳥の違い、なぜ環境回復事業として人工干潟の造成が有効であり必要かを解説。
- 5) 観察会終了後に周辺のゴミ拾いを行うことで、新しく干潟の環境をつくること以外に今ある環境を保全する大切さを知ってもらう。

実施準備や計画の詳細

- 1) の準備として、これまで玉島ハーバーアイランドにて撮影したシギ・チドリ類を印刷し、ラミネーターを使って屋外でも見やすくするために加工した
どのようにして玉島の地に渡ってくるのか、生態や食性については写真を見せながら冒頭に講師に行ってもらおう予定であった。
- 2) 倉敷市環境学習センターより、双眼鏡5つを貸し出しいただき、これと当会で保持している双眼鏡3つ、フィールドスコープ3台を用いて遠くにいるシギ・チドリ類などを観察してもらう計画であった。
- 3) 4) 観察会終了時に講師より、見られたシギ・チドリ類の種類によって、1) で見たような種類のシギ・チドリ類がなぜ高梁川河口干潟では少ないか、を解説、食性や餌の取り方、干潟の底質の状態などについても解説いただく計画であった
また、玉島ハーバーアイランド沖に人工干潟ができることによって渡り鳥にどんなよい影響があるかも解説いただき、その必要性や有効性について理解を深めてもらう計画であった。
- 5) 観察会終了後に参加者全員で周辺の清掃を行う計画であった。
散歩やレジャーで訪れる人々も多く、ゴミのポイ捨てが目立つ。放置すればすぐに海に流れ出ること、また、釣りのゴミも多く、テグスやルアーなど小さな鳥にとって命を落とすことにもつながることなど解説。

今後の反省点として、秋は台風の影響を受けることが多いため春の渡り期に実施する方が適している、広報活動はチラシを印刷して配布、等より SNS を上手く活用して実施した方がコスト、効率ともに良いということがわかった。

守屋さんに聞いてみよう!
高梁川河口干潟
秋の渡り鳥観察会
2022.9.18 sun.
9:30~10:30 (受付9:00~)

参加無料
要申込み

五島の干潟を学ぶシリーズ第一弾!
 岡山県最大と言われる高梁川河口干潟。環境省の「生物多様性の観点から重要度の高い海域」も近いこの場所では、どんな渡り鳥と出会えるでしょうか?
 そして五島の他の干潟とはどんな違いがあるでしょうか?

講師 守屋 年史氏(NPO法人 バードリサーチ)

場所 高梁川河口干潟(連島側 グラウンド横)

その他 徒歩での移動もあるため動きやすい服装でお越し下さい。
 双眼鏡・スコープは準備していますが「お持ちの方はご持参下さい」。
 観察会終了後、5分程度周辺の清掃活動を行います。

守屋 年史(もりや としふみ)
 NPO法人 バードリサーチ (東京) シゴ・チドリ調査事務所、五島乙島出身。
 野鳥観察のポイント、特徴など、色々質問してみましょう!!

たましま 干潟と鳥の会
 2021年、五島の干潟とそこに飛来する野鳥の生態環境を守りたい!
 という人たちが発足した新しいタイプの団体です!

どんな鳥に
あなかな?

第二弾は10月22日(土)
 干潟の生きものの観察会を開催します!
 講師は鳥獣ワットランドグループ理事の
 和田丈一さんです! 詳しくは喜会HPで!

申込は下記メールまたはお電話で【お名前・人数・ご年齢】
 をお知らせ下さい。
 ※小雨決行、荒天の場合中止します。
 ※感染症拡大に十分配慮して開催します。状況により直前に中止する場合があります。
 ※発熱・咳・全身痛などの症状がある方は参加をお控え下さい。参加中はマスクの着用をお願いいたします。

お申込み・お問い合わせ先
 たましま 干潟と鳥の会 事務局
 Tel.090-6101-0238 | ✉:tamashima.higata@gmail.com
 HP:https://tamashimahigata.wixsite.com/website

※このイベントはタカラ・ハーモニスタフンドの活動助成によって開催します。

B) 教えて！昔のたましまの干潟～昭和の玉島の干潟を知る世代へのインタビュー及び 動画づくり

2022年5月に地元の歴史研究などを行っているたましま会（玉島学会）からの誘いで、倉敷市立玉島西中学校の地域学習の授業に参加。玉島地域に飛来する渡り鳥の紹介や干潟の解説などをした。その際、ほとんどの生徒が、干潟がなんであるか、どこにあるか知らないと回答した。

また、その親世代である40代の方からも、自身が子どものころにはすでに垂直護岸となっていたため、干潟で遊んだり近づいたりした記憶はないという話を聞いた。

一方で、さらにその親世代となる70代の方々からは、自分たちが子どものころには、遊ぶといえば海辺、干潟だった。学校帰りに魚を捕ったり泳いだり、それはもう楽しかったし、生きものがたくさんいた、といった話を聞く機会があった。こういった時代の話は何らかの形で残しておきたいと思い、若い世代でも見やすいようにと、インタビュー動画を作成することを企画した。

計画段階ではもっと多くの人にインタビューを行う計画であったが、4名へのインタビューが限界だった。また、動画の長さも当初は30分程度あってもよいのではないかと考えていたが、依頼した業者から、ユースをターゲットにした動画ならあまり長すぎない15分程度が適当との助言があった。

企画会議の段階では、玉島の歴史的背景などに触れる内容、干拓の歴史などを入れる、過去の地域的特徴である塩田の歴史なども盛り込む、と、様々な意見があがった。

動画作成業者とは月1回程度のオンライン打合せを実施し意見交換を行った。

打合せの中から、最終的に動画を利用する干潟マップ作りワークショップの1回目、12月17日に間に合わせるために遅くとも10月中にはすべての動画を撮り終え編集に取り掛かる必要があるということで、インタビューは6月末から試行を繰り返して行った。

できるだけ干潟の状況がわかる場所、干潟の近くで静かな場所を選定。

なるべく干潮と重なる時間、雨天でない日、暑すぎない日と時間帯、インタビューを受ける人の日程調整と、様々な制約があり、動画を撮り終えて業者に渡せたのは11月に入ってからとなった。

梅雨時期にはほとんど撮影ができなくなり、梅雨明けに、とっていたら高温とセミの鳴き声が大きくなり、ピンマイクを付けてもらったが声が拾えないほどの状況となってしまい、セミの鳴き声と天候が落ち着く9月にも撮影を実施した。

カメラを回さない状態の方がみなさんよくお話しして下さって、カメラを回すと緊張からかりハーサルの時に話していた内容がほとんど聞けない、時間的にも1回撮るのが精いっぱいだったため、同日に何度も撮り直しができないといった問題もあり、計画時点では予想していないほど困難だった。

こういったことから当初計画にあった干拓の歴史などは入れず、インタビューのみのシンプルな動画となった。動画は「たましま 干潟マップづくりワークショップ」で利用。その後はyoutubeチャンネルでの公開も検討している。



それぞれの動画、キャプションの一部を掲載

C) たましまの干潟に生息するいきもの観察会

イベント名：潟見人(ガタミニスト)・和田さんと干潟の生きものを見つけよう！

高梁川河口干潟 干潟のいきもの観察会

実施予定日：2022年10月22日(土) 14:30~15:30

実施場所：高梁川河口干潟(左岸)

講師：NPO法人 南港ウェットランドグループ 理事 和田 太一氏

参加者：12名

玉島には干潟ができる場所が点在しているが、いずれも駐車場の確保などが難しく、高梁川河口干潟の左岸、連島町鶴新田にて実施した。

前日の下見にもNPO法人 南港ウェットランドグループ、和田太一理事(以下、和田氏)に同行いただき、高梁川河口干潟以外の玉島の干潟も回り様々な生きものを確認することができた。(観察会も含めた確認種については別途記載した。)

参加者は3家族、個人参加が3名、計12名となった。

前回同様、広報に苦戦した。申し込みをいただいた中には未就学児の参加希望が2件あったが、スタッフも少ない中、危険を考慮して今回はお断りさせていただくこととなった。子どもが成長し、同様の催しの際はぜひ参加したい、とのお声もいただき、こういったイベントの必要性を実感した。

当日、現地ではここ1年ほど流行の兆しを見せている、干潟上にくぼみをつくり、その上に水を溜め、ボディボードで滑るというアクティビティがあり、それを実施しているグループ10数名がいたため、下見の際に計画していた場所よりさらに河口側へ移動して実施した。そのため思っていたよりも泥質の環境で、かなり泥だらけになりながらの生きもの観察となった。

まずは全体で集まって、たましま 干潟と鳥の会について説明、観察に際しての注意事項などを代表の西井から説明。

その後、和田氏より干潟の生きもの観察方法などを解説いただいた。

岩場周辺にはカキやフジツボなども生息していてケガをする危険もあるため準備した軍手をしていただき、スコップ、ふるいなどを手に、まずは30分程、各自でなるべく多くの種類を採取してみましよう！との和田氏の呼びかけに、みな自分の決めた思い思いの場所で生きもの採集に励んでいた。

全体説明の際に、テトラポットの周辺、干潟の砂地、干潟の泥地などで生息する生きものが違うという解説をしていただいたので、それぞれの特徴のある場所を探索、何か見つかりと歓声があがる、という状況であった。

はじめは泥に入るのを躊躇していた子どもたちも、最終的にはかなり泥んこになって30分では足りないという状況が生まれていた。

採集終了後、改めて集合し、採集した生きものの解説を和田氏からしていただいた。

自分の捕まえた「カニ」が、実は「ハクセンシオマネキ」という名前があった、貴重な種である、といった解説に先ほどまでの熱狂が静まり返って、みな真剣に和田氏の説明に聞き入っていた。

採集終了し、用意した清水である程度の泥を落としていただいた。

そのあと、簡単に今問題となっている海ゴミのことや、それらを放置すると鳥や干潟の生きものにも悪影響があることなどを解説。みなで周辺の清掃活動を5分程度行った。

こちらは強制参加ではなく、希望者のみ残っていただくことでお願いしたが、帰る方はほとんどおらずこちらも楽しそうにゴミを集めて下さり、終了後に散会となった。

アンケート結果は以下に記載した。

回収率は100%となった。(家族単位の参加は家族単位の回答となった) 大満足、満足の回答も100%となり、実施してよかったし、次回の開催に対する励みにもなった。玉島地域では干潟において、家族単位で穴ジャコ掘りをしたり、マテ貝捕りをしたり、という光景を見ることはあるが、そのほかの食用以外の生きものたちに関心を寄せて、説明まで行うというイベントが少ないように感じており、また実はそこに対する需要というのもあるのだということもわかった。

今後の改善点として、採取した生きものの記録係が必要、1時間では短いため1時間半～2時間に延長する、今回は浅めの容器ばかりで、捕獲したタビラクチが逃げてしまったため、深さのある容器も必要など、次回実施に向けて会の中で話し合った。



2022年10月22日 高梁川河口干潟 干潟のいきもの観察会確認種（一部前日の下見時発見種も含む）				
和名	環境省		岡山県	備 考
	レッドリスト 2020	海洋生物 レッドリスト 2017	レッドデータ ブック 2020	
多岐鰯目的一种（ヒラムシ類）				砂泥干潟の表面を這い、アナジャコ類などの巣穴内にみられることもある種
クログチガイ				
コウロエンカワヒバリガイ				外来種
マガキ				
ソトオリガイ				
テリザクラ				
ウネナシトマヤガイ	準絶滅危惧			
マルウスラタマキビ				
イヨカワザンショウ	準絶滅危惧			前日下見時に確認
アラムシロ				
カラムシロ				外来種
チロリ科の一種				
カキドコイソゴカイ				マガキなどが付く転石の下に棲息
ウロコムシ科の一種				転石裏に付着
ミスヒキゴカイ				
イトゴカイ科の一種				
ウミイサコムシ科の一種				
シロスシフツツボ				外来種
アミメフツツボ				前日下見時に確認
ドロフツツボ				前日下見時に確認
アメリカフツツボ				外来種。前日下見時に確認
コクテンシャコ				国内で100年以上記録が途絶えていたが、岡山・広島で近年再発見された
ヨシエビ				
シラタエビ				
テッポウエビ				
イソテッポウエビ近似種				前日下見時に確認
マングローブテッポウエビ		準絶滅危惧	絶滅危惧Ⅱ類	
セシロムラサキエビ				
ニホスナモグリ				
ハサミシャコエビ				
ユビナガホンヤドカリ				
ガザミ属の一種				ガザミもしくはタイワンガザミ
マメコフシガニ			準絶滅危惧	
カクベンケイガニ				
タカノケフサイソガニ				
ヒメケフサイソガニ		準絶滅危惧	準絶滅危惧	前日下見時に確認
ヒメアシハラガニ		準絶滅危惧	準絶滅危惧	
ハツハリアケガニ		準絶滅危惧	絶滅危惧Ⅱ類	
コムツキガニ				
チゴガニ				
ヤマトオサガニ				
スナガニ			準絶滅危惧	
ハクセンシオマネキ	絶滅危惧Ⅱ類		準絶滅危惧	
トビハゼ	準絶滅危惧		絶滅危惧Ⅱ類	
タビラクチ	絶滅危惧Ⅱ類		絶滅危惧Ⅱ類	マングローブテッポウエビの巣穴に共生すると言われている
ツマクロスシハゼ				テッポウエビの巣穴に共生する種
マサコハゼ	絶滅危惧Ⅱ類			
ヒメハゼ				
マハゼ				

干潟の生きもの観察会終了後ではあったが、和田太一氏の追加調査により、およそ1世紀ぶりとなる2022年6月に生息が確認され驚かれていた「コクテンシャコ」も見つかった。「コクテンシャコ」は100年以上前に国内の生息記録が残っているがそれ以降は確認がなく、絶滅かとも言われおり、このような生きものが身近にいるということに驚くとともに、大切にしていかななくてはならないと思いを新たにされた。



高梁川河口干潟で見つかったコクテンシャコ（撮影：南港ウェットランドグループ 和田 太一氏）

	干潟に対する興味についておたずねします	これからもこのようなイベントがあったら・・・	今日の観察会の満足度を教えてください
1	もともと興味があった	参加したい	満足
2	知りたいと思って参加した	内容による	大満足！
3	知りたいと思って参加した	参加したい	大満足！
4	知りたいと思って参加した	参加したい	大満足！
5	もともと興味があった	参加したい	大満足！
6	もともと興味があった	参加したい	満足

自由記述

- ・干潟の生き物の種類に驚かされたと同時に食物連鎖等干潟そのものの重要性を知ることができ、とても有意義な会だったと思います。
- ・人工島の干潟（ほって置いたら干潟になった部分）には鳥が居る、来る。という前提の基に下記を記載しました。干潟の変化（昔と現在）、干潟のいきもの種類とその個体数（推定値でOK）の変化、干潟の周辺環境の変化、水質の変化、土壌（泥）の変化など各々の変化とそれらを統合（相関関係など）した変化をデータとして残しておくべきと思いました。干潟の生き物を餌とする鳥類の種類と個体数を調査し、膨大なデータとして蓄積することはとても重要と思いました。理由は、人工島に存在する干潟と河口などに有る干潟の違いを調べる。そして、それらの干潟を利用する鳥類を比較（種類・個体数）する。両者で違いはあるのか？あるとすれば何か？を突き止めて、人工島に存在する干潟に優位性があれば河口の干潟に取り入れるべきと思いました。すごい大変なことと思いますが、データが有れば解り易いですね。一つ一つ解明できれば良いと思います。焦らず、じっくりと。
- ・干潟の生き物について知りたいと思っていたのですが、なかなか詳しい方に教えてもらえる機会がなかったので、とても勉強になりました。
- ・魚釣りが好きなので、餌となる生き物に興味があり、それと同時に護岸工事などにより生息場所が無くなる事が残念です。今回は高梁川河口の干潟がどんな感じか、確認が出来たらと思い参加しました。



D)たましま干潟マップ作りワークショップ

実施予定日：第1回 2022年12月17日（土） 13：30～14：30

第2回 2023年1月21日（土） 13：30～14：30

実施場所：玉島市民交流センター 交流棟2階 第5会議室

参加者：3名（1回、2回あわせて）

たましま干潟マップ作りワークショップは以下のような概要で実施した。

「玉島に点在する干潟を未来に引き継ぐため、場所や今すんでいる生きものはもちろん、昔むかしの話を聞きながら手書きマップを作っていくよ！みんなのアイディアで楽しいマップにしましょう。」

ここでもネックは広報となった。山陽新聞の情報ひろばや当会HPなどにおいて宣伝したが参加希望者はほとんど集まらず。コロナウイルスの感染もまだ収まっていない冬期であったことも影響したと思われる。

1回目の12月17日（土）は希望者2名、2回目の1月21日（土）となり、中止も考えなくはなかったがすでに会場も借りており、少なくともでも参加のご希望があったので実施させていただいた。

冒頭15分で、本活動の1つとして実施していた、昭和の玉島の干潟を知る世代へのインタビュー動画を見ていただき、それぞれ感想を出し合ったり、出てきた生きものを書き留めていただいたりしながら、これから作成する干潟マップの案を出し合った。

第1回目では、玉島地域は江戸時代から塩田が広がり、今ではソーラーパネルや自動車教習所となっていますが、そのあたりの時代に伴った変化や干拓の歴史を盛り込んで、という意見が出された。

第2回目も同様に動画鑑賞してから意見出しを行った。

今回は高梁川河口干潟についての意見が出され、古くは川の中洲で農業がおこなわれ、砂地を活かしたごぼう、すいか、ニンジンといったもの作っていた、それほど川の中洲が広がったという話が聞けた。現在、高梁川河口の中洲は、干潮時に干出するが営農できるほどの広さもなく、常時干出しているわけではないためこういった情報はかなり貴重なもので、後々のためにも残しておく必要があると思い、この内容はぜひ干潟マップに取り入れたいと思った。



全2回のワークショップを経て、以下のようなラフ案が出来上がったが、情報量と未永く残していく事を考えると、本活動の時間内でクオリティ高いものを創出することが困難となり完成まで到達できなかった。

しかしながら、過去の豊かだった干潟と現状を比較し、また地域内外の方が実際に活用できるような干潟マップの必要性は十分にあると考えているため、今後も完成に向けて進めていきたい。



玉島地域を、干潟を起点に3つのエリアにわけ、それぞれの干潟の特徴や、生息する生きもの、また裏面には飛来する渡り鳥の写真なども入れ、今後完成させる予定。

五島に点在する干潟を未来に引き継ぐため、場所や今すんでいる生きものはもちろん、昔むかしの話を聞きながら手書きマップを作っていくよ！みんなのアイディアで楽しいマップにしましょう。

たましま
干潟マップ作り
ワークショップ全2回

■動画鑑賞：昔の五島の干潟を知る人へのインタビュー動画をみんなで見よう！

■みんなで意見を話し合っって世界に一つしかない地図を作っていくよ！どちらか片方の参加でもOKです！！

参加無料・要申し込み

1回目：2022年12月17日(土) 13:30～14:30

2回目：2023年 1月21日(土) 13:30～14:30

会場：玉島市民交流センター 2F 第5会議室

たましま 干潟と鳥の会 事務局
Tel.090-6101-0238 | ✉:tamashima.higata@gmail.com
HP:https://tamashimahigata.wixsite.com/website

●このイベントはタカラ・ハーモニストファンドの活動助成によって実施します。

E) たましまの未来に渡り鳥の集う干潟を残したい！！

～なぜ今干潟なのか～シンポジウム

実施日時：2023年5月13日（土）13：00～16：00

実施場所：玉島市民交流センター 交流棟2階 第2会議室

講師：下記プログラムに記載

参加者：67名（会場参加：34名・オンライン参加：33名）

共催：NPO法人 ラムサールネットワーク日本

（プログラム）司会進行：たましま 干潟と鳥の会 松本 英子

□開会あいさつ：たましま 干潟と鳥の会 代表 西井 弥生

□基調講演Ⅰ：NPO法人 南港ウェットランドグループ 理事 和田 太一氏
「干潟とそこ（底）にすむ生き物たち」

□基調講演Ⅱ：NPO法人 バードリサーチ シギ・チドリ類調査事務局 守屋 年史氏
「渡り性水鳥 シギ・チドリ類のモニタリングと国内の湿地」

□基調講演Ⅲ：国立研究開発法人 海上・港湾・航空技術研究所 港湾空港技術研究所 沿岸環境研究領域長 桑江 朝比呂氏

「シギ・チドリ類の食性研究からみた干潟生態系の保全、再生、創造」

□総合質疑ならびにパネルディスカッション：

モデレーター：NPO法人 ラムサールネットワーク日本 理事 柏木 実氏

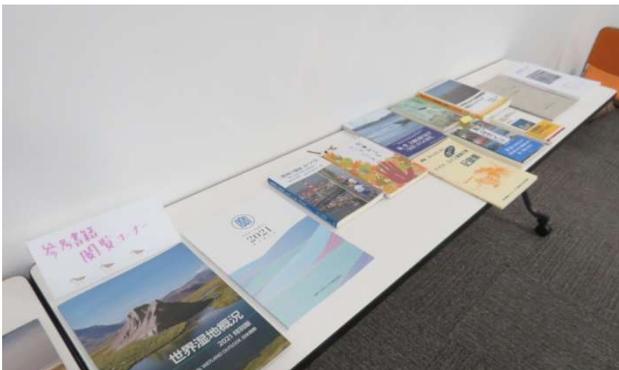
NPO法人 ふくおか湿地保全研究会 小山内 朝香氏

□閉会あいさつ：たましま会（玉島学会）会長 武田 芳紀氏

シンポジウムは2023年5月13日、国連が定める世界渡り鳥の日に合わせ、本活動の締めくくりとして実施した。

参加者のアンケートからも関心の高さがうかがえる内容となり、実施してよかった。

干潟の基礎的な内容から底に棲む生きものの内容、渡り鳥の渡りの秘密や国内のそのほかの湿地の内容、また人工干潟の再生や創出に関する内容と、3名の講師がバトンを渡すように「干潟」というテーマで、またそこに生きる生きものや渡り鳥の危機的な状況やその保全について、改めて、昭和20年代からおよそ90%の干潟を失っている岡山県には大変重要なテーマであると再認識した。



会場には関連書籍の閲覧コーナーを設置し、参加者には休憩時間に閲覧してもらった

2023年5月13日（土）13：00～16:00

たましまの未来に渡り鳥の集う干潟を残したい～なぜ今干潟なのか～ シンポジウム
アンケート集計結果



参加者数

会場	34
オンライン	33
計	67
回答数(全体)	37
回答数(会場)	27
回答数(オンライン)	10

シンポジウム満足度（全体）

とても満足	17
満足	16
どちらともいえない	2
不満	2
とても不満	0

シンポジウム満足度（会場）

とても満足	14
満足	12
どちらともいえない	0
不満	0
とても不満	0

シンポジウム満足度（オンライン）

とても満足	3
満足	4
どちらともいえない	2
不満	2
とても不満	0

参加のきっかけ

新聞	1
広報くらしき	0
ラジオ	0
SNS	6
口コミ	13
その他	12
その他内訳	
ラムサールML	2
その他ML	3
置きチラシ	3
HP等	4

参加のきっかけ（興味の分野）

全体的に興味があった	20
干潟の興味	24
渡り鳥の興味	20
誘われた	2
なんとなく	0
その他	6

その他の内訳

自分の故郷のことだから

知人から干潟の重要性を聞いていたから、孫がトりに興味を持ったから

地元のことなので興味を持った

海全般について

玉島にこんなNPOがあるのかと思い興味半分で申し込んだ

記述回答：干潟の環境回復や渡り鳥の生息地保全について今後どのようなことが必要だと思いますか？で多かった回答

- ・普及 啓発 周知（イベント開催等）
- ・行政への働きかけ
- ・マスコミを使った広報
- ・今ある干潟の保全
- ・防災・災害
- ・現状把握
- ・中継地の確保

2023年
5月13日（土）
世界渡り鳥の日～World Migratory Bird Day～
13:00～16:00(開場12:30)

会場
玉島市民交流センター 交流棟 2階
第2会議室

参加無料・事前申込要
会場定員先着:50名
オンライン参加可

基調講演

NPO法人 南港ウェットランドグループ
理事 和田 太一 氏
「干潟とそこ(底)にすむ生き物たち」

NPO法人 バードサーチ
シギ・チドリ類調査事務局 守屋 年史 氏
「渡り性水鳥シギ・チドリ類のモニタリングと国内の湿地」

国立研究開発法人 海上・港湾・航空技術研究所
港湾空港技術研究所
沿岸環境研究領域長 桑江 朝比呂 氏
「シギ・チドリ類の食性研究からみた干潟生態系の保全、再生、創造」

参加申込み方法

Webページからのお申込みはこちら
■ <https://tamashimahigata.wixsite.com/website>
メールでのお申込み お問合せはこちら
✉ tamashima.higata@gmail.com

主催：たましま 干潟と鳥の会 共催：NPO法人 ラムサールネットワーク日本
●本シンポジウムはタカラ・ハーモニストファンドの活動助成により実施しています。





出典：2023年5月14日（日）山陽新聞 朝刊



司会は本活動の干潟の生きもの観察会の参加をきっかけに会員となった松本英子さん



パネルディスカッションでは、全国のNPOで湿地保全に努める団体の方にモデレーターとして参加いただき、実際に関わっていないと話せない意見が聞けて大変有意義であった

終わりに

たましま 干潟と鳥の会は、2021年4月に発足。

春・秋の渡り期に、主にシギ・チドリ類の調査、冬期はシギ・チドリ類や干潟に飛来するズグロカモメ、ツクシガモ等の越冬状況調査、夏期にはコアジサシの繁殖状況調査とその状況を岡山県に報告するなどしていた。

発足から1年が経過し、NPO法人 ラムサールネットワーク日本の協力も得て、活動助成への応募情報なども助言をいただき、タカラ・ハーモニストファンドの活動助成に応募させていただいた。

活動に弾みをつけたい！採用されたい！という気持ちが強く、いささか盛沢山にしすぎた感があり、動画制作やマップ作りについてはもう少し活動する会員が増え、吟味する時間もたっぷりにとってからの方がよかったかと反省した。

ただ、複数の企画を、初めてなりにも実行してみて、どの企画もやってよかったと思うものばかりで、今後またグレードアップし、玉島の特徴ある干潟の環境、干潟にやってくる渡り鳥、そこに棲む生きものたちの素晴らしさと、私たち人間との関係、危機的な状況、改善策などについて発信していきたい。そしてたくさんの人に関心を持ってもらいたい。自分たちのこれからの命に繋がることとしてとらえてもらいたい。そうすればきっと現在の、環境に負荷の大きい埋め立て事業や、代償措置のない開発ばかりの世の中も変わっていくと信じている。

謝辞

特に活動を通してご協力いただいた、NPO法人 南港ウェットランドグループ 和田 太一氏、NPO法人 バードリサーチ 守屋 年史氏、国立研究開発法人 海上・港湾・航空技術研究所 港湾空港技術研究所 沿岸環境研究領域長 桑江 朝比呂氏、NPO法人 ふくおか湿地保全研究会 小山内 朝香氏、たましま会（玉島学会）武田 芳紀氏、貝原 裕司氏、中野 雅徳氏、NPO法人 ラムサールネットワーク日本、みなさまにはこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。

また、まだ発足したばかりのたましま 干潟と鳥の会の今後の活動に取り組むための第一歩で、非常に大きな力ともなったこの1年間の活動も、ひとえにタカラ・ハーモニストファンドの助成をいただき活動できたことによるもので、心より感謝申し上げます。